

新しき日の来るまではこの髭を 剃らぬと言ひし留学生の居て

—わが「留学生問題」顛末記—

森 島 久 雄

注 以下は、1990年5月、わが文教大学の留学生諸君が創刊した日本語雑誌の巻頭言を一部手直したものである。いささか〈私〉に偏した物言いになるうが、あくまで留学生にまつわる個人的体験を語ったエッセイとして読み流して頂けたら幸いである。

(1)

1986年（昭和63年）の年の瀬も迫ったある寒い夜、今にして思えば、〈あの時〉がまさに決定的な瞬間だった。

……当時、文教大学越谷キャンパスに文学部を開設するべく、文字通り「生みの苦しみ」を味わっていた。目指す文学部の理念は何なのか、それに見合うカリキュラムの編成とスタッフをどう用意するか、施設・研究図書・備品の設置は間に合うか、果たして設置認可が下りるのか、年明けからの学生募集で受験生を確保できるかどうか……根本的なものから具体的なものに至るまで、すべてにわたってギリギリの選択と決断と行動力が求められていた。「教育学部改組小委員長」として、引き続き「文学部設置準備委員」として、なにせ〈人の処遇〉とかかわることだけに、相当にムキになって取り組んできた。後年、同じ文学部設置準備委員であった中国文学科水沢利忠先生が笑いながら述懐する。「あの頃、会議で居眠りしていると、先生（小生のこと）が机を叩くようにして大声で話されている。

その音でよく目を覚ましたものでした……。」汗顔の至りである。思えば、過去20年間、営々と築いてきた「国語教室」の根幹とかかわること、そして新設する日本文学科の将来を決定づけること、もしここでボタンをかけた違えたら、将来、取り返しのつかない悔いを残すことになる。こちらとしては〈熱くなる〉のも無理はない。相当に切迫した気持ちで会議に臨んでいたのである。設置準備委員長である伊藤健三先生（英文科）に失礼を働いたことも一度や二度ではなかった。当時のこうした状況を回想して、同じ準備委員の英文科石原武教授は、例の温顔で「維新前夜の激動期だったから、みんな殺気立っていたんですよ。」と血気にはやった私を慰めて下さる。先生の温かい、そのお言葉にどれだけ救われたことか。

……その夜も、夕方から文学部設置準備委員会が開かれていた。議題は「文学部開設の初年度から、留学生を受け入れるかどうか」という問題だった。大学事務棟二階の会議室だったか学部長室だったか。とにかく暖房だけがやけに熱かった記憶がある。設置準備委員長以下三人の委員とそれに新学部設置の対文部省交渉を一手に引き受けていた稲越教務部長（当時）以下、広報課・総務課からも数人の事務担当者が出席していた。さらに、今思えば、はなはだ異例のことではあったが、着任前の近藤功先生（日本語教育）にも特にオブザーバーとしてご出席頂いていた。近藤先生には、着任予定の国立国語研究所日本語教育センター長・南不二男先生がまだ本学と表立ってかかわれないということから、南先生の代理ということで特に私自身が根津の日本語教室にまで出向いて当日のご出席をお願いし、お迎えしていたものである。

その夜の議論のポイントは、4月の新学期から留学生を受け入れるだけの体制が整備出来るかどうかにある。しかし、各教室の事情、受け入れ事務と施設の対応、特別入試の実施の可能性、留学生の宿泊施設の確保、アルバイトの斡旋体制などなど、いずれをとっても初年度からの受け入れ実

施が無理なことは明白であった。だがその一方で、留学生の受け入れは、国際化時代に開かれた学部づくりの理念の象徴であるという思いが委員全員に共通していたのも事実である。こうしたジレンマの中で、ある程度の危険を冒しても「実施に踏み切るべし」と主張するのは勇気の要ることだった。確かに事は異国の人たちの生活全般にかかわる問題。拙速に走って取り返しのつかない問題を引き起こすより、条件が整うまで留学生の受け入れを見送ろうという慎重論こそむしろ正論だったかもしれない。夜の9時も廻り、会議の空気も言わず語らずのうちに「留学生受け入れ延期」に傾いて行ったのも無理からぬことではあった。

その時、私は「見送り」になるにしても「やっぱり言うだけのことは言っておかなくては……」という程度の気持ちから発言を求めた。自分では冷静に語り出したつもりだったが、話すうちにだんだんと「乗って行く」自分に気付いていた。はたから見れば、また、例の激しい調子になっていたのだろう。

……われわれの目指そうとしている新学部は、従前の教員養成の伝統を引き継ぎながらも、より開かれた学部であること、国際化時代に対応した語学教育の充実を目指した学部であること、そして、その柱の一つとして日本語教育を抱え持ったこと、そして、その日本語教育と表裏一体になっているのが留学生受け入れであることなどを力説し、さらに「今、条件の未整備を理由に留学生受け入れを見送れば、一体いつになったら整備されると言うのか。結局は問題を先送りするだけのことではないか。一人でいいから専門の事務を置き、日文科の当時者能力に任せて初年度から受け入れるべし……。」と言い切ったのである。まさに維新前夜の乗るか反るかの長州藩における高杉普作の暴走そのものだった……。今思えば、あの時あんなにも強く発言した動機はなんだったのか不思議でならない。あるいは、そこには「どこに所属させるか」いろいろ議論のあった日本語教育を

日文科に引っ張ってきた当該教室という面子も潜在的に働いていたのかもしれない。しかし、それよりも大きく影響したのは、オブバーザーとしてその場に陪席しておられた近藤功先生の、われわれを不思議そうに眺めておられたその表情だった。数ページにわたる資料までご用意頂き、留学生・就学生やビザの区別も知らない私どもに対して、留学生受け入れの専門的な条件から日本語教育の実情に至るまで縷々説明して頂いたわけだが、その近藤先生を前にして「無期延期」ではあまりにも申し訳ないという個人的な思いが私を突き動かしたのだろう。

〈歴史〉というのは、案外こうしたチョツとした人間的な動機で変わっていくものかもしれない。会議の流れは一挙に逆転、「受け入れ」に決まった。たぶん「日本語教育を抱えた日文科がそう言うなら……」というところだったのだろう。もう引っ込みがつかない。この夜を契機にして初年度から留学生受け入れを目指して、あわただしい奔走が始まった。近藤先生を中心にして、関係方面のPR、受験生の確保、学費軽減措置などなどの手を打ちながら、どうやら入学試験を実施し、やがて昭和62年（1987年）4月、本学最初の留学生を迎える日がやって来たのである。

入学式の朝、やがては消えて行くであろう中等国語専攻への愛惜の念とともに、私はこの目で確かめたく新入生受け付けの傍らに立った。のぞき見る名簿の中のカタカナ名や中国名と留学生諸君の顔のある種の感慨をもって眺めたのだった。

(2)

文学部発足と同時に、私は申請通り一年生対象の「日本語表現法」の授業を受け持った。が、留学生の混じるクラスは近藤先生にお願いすることにした。これまで外国人との接触のまったくない、あまりにも日本人的な自分がへたに手を出して変な摩擦を起こすより、外国人の扱いに慣れた先

生にお任せしたほうが良いと判断したからである。以後、留学生の姿を遠くから眺めながら、ある種の安堵感と自己満足を秘かに味わっていた。ところが授業分担の都合で昭和63年度から、なんとこの私が留学生のいるクラスを担当する羽目になった。果たして東京方言の饒舌体の私の講義スタイルが彼らに通ずるのだろうか……、誤解による感情の食違いが生じたらどうしよう……年甲斐もなくかすかな緊張感を抱きながら最初の授業に臨んだのだった。

始めてみると、こうした気遣いはまったくの杞憂だった。授業を2、3回やったあとの日文科新入生の新歓コンパに遅れて出た時、中国のSさんや台湾のJさんが大声で「モリシマ先生！ モリシマ先生！」と呼んで、坐る場所を作ってくれる。膝を接するようにして坐ると料理を取ってくれたり、ジュースをついでくれたり、そして故郷の話大声で話してくれたりする。その時、私は妙に心嬉しかった。そして、私の中に消しがたくあった外国人に対して身構えていたものがきれいに消えていった。

かくして時代遅れの私の〈うぶな〉国際交流が始まった。それは毎日が発見と感動の連続だった。こうした私の姿は、留学生の扱いに慣れた人たちから見れば愚にもつかない他愛ないものに見えただろう。でも留学生たちの生きる姿の中に、戦後の日本人が失った真面目さや謙虚さや恥じらいや人情や素朴さやある種の献身や向上心などなどの〈善き美德〉の数々発見することは、国語教育に携わり、わが国の子供たちの教育の在り方を模索している私としては言葉では言い尽くせない貴重な経験であった。

例えば韓国のKさん。授業中、実に感じのいい笑顔を見せる。時には精一杯涙ぐむ。ここには表情を失った日本の若者にはない豊かな情意性がある。授業の一環として行なったスピーチも圧巻だった。「皆さん（日本人の学生のこと）は、1945年の時、一人の中国人から受けた大きな恩を知っていますか。その人は日本の陸軍士官学校の卒業生です。その人は日本の

敗戦の時、4つの恩をオクニに与えたのです。それは……」たどたどしさの残った日本語ながら、日本の学生たちを指差してしっかり話すのだった。「恩」「オクニ」という現代の日本では死語になっている語彙が印象的で私も思わず引き込まれていく。「その将介石総統のおかげでオクニの今の繁栄があるのです。皆さんのオクニは今、お金持ちになったけど、今こそオクニのナショナル・アイデンティティーが問われているのです。」私は恥ずかしくなった。日本人の精神の貧しさが指摘されたからではない。Kさんの問題意識を日本の学生たちがどのレベルで受け止めたかに思いを走せたからである。

中国から来たSさんの印象も強烈だった。北京動乱の時、Sさんたち留学生数人と学生ホールでお茶を飲みながら話し合ったことがある。Sさんは、しきりに祖国の近代化と民主化に思いを寄せていた。後になって、これまた授業の一環として行なった短歌会で、その時の印象を私は次のような青臭い啄木ばりの歌に詠んで提出した。

新しき日の来るまではこの髭を剃らぬと言ひし留学生の居て

自分としては民主化要求のデモまで話題にした留学生たちに対する私の思い入れを比較的素直に込めることの出来、この歌なら上位で入選するだろうと秘かに期待していたのだが、なんとたった2点しか入らなかった。

彼の作成した朗読テープ「私の本棚」（自分の好きな日本の文学作品の一節を朗読した録音テープ）も見事だった。ブラジルの演奏家によるピアノ曲をBGMに使い、それに自作の詩（もちろん日本語）を重ねた『笑顔』と題されたそのテープを帰りの車の中で聞いたのだが、その時の興奮は忘れられない。「出津橋の上から見る富士山」に「お早よう、さよならとあいさつする。」「あまり有名でない大学だけど」「多くの若者はこの大学から世界を見る」「自動販売機では買えない笑顔をこれからも大切にしよう」といったフレーズの詩を端正な固い発音で朗読していくのだ。お座成りの

テープも少なくなっただけにこのSさんの作品は日本の一部の学生には見られない〈意欲・気力・真面目さ〉を感じさせるに十分だった。このテープを聞いたSさんを知らぬ学生たちもその真面目なメッセージに心動かされたのか、ダビングさせてくれという要望が出るほどの作品であった。

こうした留学生とのよき思い出はキリがない。「先生の授業を受けていて何回も遠い昔のことを思い起し、涙ぐんだりしました。慣れない日本の俳句や短歌も一生懸命作りました。」といった文面の年賀状をくれた留学生。「モリシマ先生は痩せている。これ、飲んで下さい。」と言って高麗人参を持参してくれた留学生。景德鎮の陶器文具をわざわざ買って帰って来た留学生。どれもこれも胸の熱くなる思い出ばかりである。留学生とのこうした私の触れ合いはわずか二年間だけだったが、それは私にとっては初めての〈国際交流〉ただだけに非常に美しい思い出になっている。今振り返ってみて、単に日本語の言語形式と記号操作の技術の教授に留まることのない国境を越えた人間的な交流ができてよかったと心から喜んでいる。

……今から7年前の夜、あの文学部設置準備委員会の席上で、初年度からの留学生受け入れを騎虎の勢いで発言したのだったが、果たして〈ポタンのかけ違い〉だったのか、それとも〈正解〉だったのか。その見極めは、これからの歴史が下していくのだろう。